

タイトル	古代社会の教育：古代メソポタミアの資料を中心に
著者	桑原，俊一
引用	年報新入文学，5：32-89
発行日	2008-12-31

古代社会の教育

——古代メソポタミアの資料を中心に——

桑原 俊一

はじめに

人類史において人間が本格的に知識を伝達し、それを集積して高度の知的文化の創出に至るには都市の出現をまたなければならなかった。古代メソポタミアは前二〇〇〇年前葉には最も早く都市国家を建設し、文字が社会活動の必須の道具となっていた。文字文化の発展は都市国家の諸制度を広範囲にわたって統率・管理しうる社会を可能にした。メソポタミアの場合、この文字の獲得が文化史的基軸の転換点となったといえる。もちろん文字の案出以前に長期にわたる口承による諸文化活動が存在したことはいうまでもない。本稿では都市国家、所謂ポリスの誕生にともない文字文化の発展を可能にした古代

社会の教育について検討する。しかし本稿が取り扱う範囲は古代社会の教育を網羅的に取り扱うことではなく、古代メソポタミアの教育関連資料に限定される。広く西洋教育史で取り扱われる古代教育はボリス時代の教育、前五世紀以降古典ギリシア・ローマ時代から始められるのが通例である。本稿では古代メソポタミア（前三〇〇〇年紀以降）の諸資料とりわけ古バビロニア（前二〇〇〇年～一六〇〇年）を検討し、もう一つの教育の源流を探る試論である。

西洋と東洋の地理的区分は古来ギリシア・ローマから見て、西と東に分けられている。したがって今日なお西洋教育史を取り扱う場合、古典ギリシア・ローマ時代から始めるのが一般的である⁽¹⁾。ギリシア・ローマに先立つオリエント世界は高度に発達した官僚制度を確立し、教育制度もシステム化されていたにもかかわらず、その位置付けはエジプトと並び原始社会の学習や教育として述べられるにすぎない。地中海世界と西アジアは歴史的にも文化的にも複層的・多重的に相關し、一つの巨大な文化圏を形成してきたのである。古代メソポタミアから出土する教育に関する諸資料は、古典ギリシア・ローマに起源する教育と今日まで継承される教育観との親和性を提示することになる。つまり、時間軸に沿って言換すれば、最古の都市国家の成立をみたメソポタミアは、書記の養成に基盤をおく高度な教育システムを構築していたのである。周辺諸国はこのメソポタミアの教育制度を受容しつつ独自の発展を遂げた。一方は、シリア・アナトリア地域であり、他方はギリシア・ローマである。歴史的には、これに続くキリスト教世界がこの両者から教育の理念や実践を採用したといえよう。現代の西洋教育は疑いなく中世のキリスト教修道院教育から派生・発展してきた。とりわけカリキュラムは変容されつつも、継承されてきたといつてよいであろう。現代の教育は初等教育から高等教育まで多様化し、問題を一元的

に論ずることは困難である。本稿では基本的な西洋教育事情を踏まえ、古代メソポタミアのいくつかの教育関連資料を提供し、古典ギリシア・ローマの教育に対する、もう一つの教育の水脈について論考を加えたい。

二 古典ギリシア・ローマの教育

(一) 古典ギリシア

エーゲ海域では、クレタ文明（前三〇〇〇～一六〇〇年）やミケーナイ文明（前一六〇〇～一二〇〇年）が栄えた後、暗黒時代を経て、前九～八世紀になって北方からのギリシア人による都市国家（ポリス）が形成された。ホメロスの叙事詩はギリシア社会の様相を始め人間生活のさまざまな哀歌を生み出した。彼の叙事詩の中に当時の教育に関する興味深い伝承もあるが、本格的教育論が展開されるのはホメロス以後になる。もともと本格的に学校教育が始まると、ホメロス（Homeros、前八〇〇以前）作品は最も典型的の文学教本として使用されていく。教育論についていえば、まずソクラテス（Sokrates、前四七〇／六九～三九九年）、プラトン（Platon、前四二七～三四七年）、イソクラテス（Isokrates、前四三六～三三八年）そしてアリストテレス（Aristoteles、前三八四～三二二年）を取り扱うべきであるが⁽²⁾、本稿の目的は教育理念や教育思想の検討ではなく、教育の日常と実践に関わる事例を検証することにある。したがって前五世紀以降の学校教育の具体的日常から始めることにする。

アテナイの教育システム⁽³⁾ は子どもの成長発達と都市生活の要請を基本として構成されていた。子

どもは七歳になって学校に通うが、この期間が「幼児」(paidion)である。七歳から一四歳までは「子ども」(pais)・一五歳から一七歳までは「青年」(neoi)・一八歳から二〇才までは「エフェーボス」(ephebos)とよばれた。二〇才以上は「成人」(aner)・「老人」は「ゲローン」(geron)といった。教育制度は、幼児は両親が家庭で行うのが通常であった。学校としては「パライストラ」(palaistra)が少年に、「ギムナシオン」(gymnasion)が青年に、そして「エフェービア」(ephebia)がエフェーボスに設けられた⁽⁴⁾。

初等学校(私塾)で、はじめて読み書きを習うようになる。日課を終えた子どもたちは「パライストラ」(現代的に表現すれば、一種の屋外体操場である)に行き、五種競技が練習されていた。レスリング、徒競走、跳躍、円盤投げ、槍投げであったことが知られている。運動には更に狩猟が付け加えられていた。狩猟は特にスパルタ人には好まれた⁽⁵⁾。中等教育以上は主として上流階級の者に限られていて、一般庶民に及ぶことはなかった。「パライストラ」は私塾であり、授業料も必要であった。ここでは専門的教師(paidotribes)がいて、体育の指導をした。しかし、単に子どもの運動場ではなく、身体的教育と知能教育を施すことが目的の学校であった。ここにギリシア特有の運動と共に徳性(arete)を育てる思想を見ることができる。

私塾である初等学校は「パライストラ」と読み書きを教える「学校」(didaskalion)がある。子供たちは「学校」に「書き板」(石版や木版に蠟を塗ったもの)や琴を携えてかよった。上流階級の子どもたちは奴隷の家庭教師パイダゴース(paidagogos)が道具を携えて、主人の息子に事故がないよう往復の付き添いをし、その行動を監視した。学校といっても多くの場合一人の教師が助手がいる程度で

あった。教室には机はなく、椅子に腰かけて教師と対面して受ける個人授業であった。

子どもたちは文学、語彙、文章の読み書きを学習し、更に詩の朗吟、音楽（琴などの楽器や唱歌）の練習をした。教材は、ホメロス、エウリピデス（Euripides, 前四八五～四〇六年頃）、散文ではアイソ波斯（イソップ、Aisopos、前六世紀頃）の『寓話集』が使用された⁽⁶⁾。偉大な詩人の詩を大声で朗読し、暗唱することは、正確に発音し、律動的に音読する助けとなったのである。

後述する古代メソポタミアとの関連から、ギリシアにおけるアルファベット教育について言及する必要がある。子どもたちは始めに個々のアルファベットから学び、次にアルファベットの最も簡単な結合を学習する。文字を学んだ後に音節の獲得に進み、更に単語の区切り（読点）と句点や強勢（アクセント）を習得しなければならなかった⁽⁷⁾。

外国語学習が意識され始めるのは、ギリシアの場合、ヘレニズム時代も後期に入ってからのことである。ギリシア人は外国語から言語の体系を学び、多言語併用の利便性を十分認識していたとはいえない。この点でローマの教育はギリシア文化に範を得ていたこともあり、ローマ人は早くからギリシア語とラテン語の両語教育を実施していた。

教授法は暗記、暗唱、反復練習が殆どであった。学習の進捗状況を確認するため、教師はしばしばテストを実施し、出来が悪ければ再び反復練習が課せられた。アテナイの子どもたちは夜遅くまでいくつもの学校に通った。夜が明けるとすぐ「パライストラ」に出かけたが、夜明けの遅い冬などは灯りをつけて行くことさえあった。運動を終えると、水浴をして帰宅し、遅い朝食をすませ、「初等学校」にいった読み書きを習ったり、「音楽学校」に行ったりして、琴（lyra; kithara）や笛（aulos）を習った。そ

のうえ、子どもたちは学校から一時帰宅した後、再び「パライストラ」に出かけ夜遅くまでそこで過ごした。子どもたちは学校教育のため毎日多くの時間を割かなければならなかった。土曜日や日曜日の休みはなかったが、休日としては祭典とか、地域の功労者の記念日とか結構多かったようである⁽⁸⁾。

少年が一五歳になると「ギムナシオン」で教育を受けることになる。これは公立学校であって、体育が中心であった。競争、跳躍、槍投げ、レスリング、ボクシング、格闘技 (pancratium) が主なカリキュラムであった。「パライストラ」同様、「ギムナシオン」の教育においても、美しき体と美しい心を持つ青年の養成を目的とした。「ギムナシオン」には「ギムナシアルコス」(gymnasiarchos) なる体育監督官 (校長) によって管理運営され、実際はアテナイでは「体育教師」(paidotribes) が行った。

「エフェービア」は元来国防的目的を持つ「青年訓練所」であるが、しだいに体育に変わって、知的教育の場となっていた。ヘレニズム時代 (前三二〇年頃～前三〇年頃) になると、軍事的目的は失われ、富裕な青年たちの社交と娯楽の場になるとともに、知的教育の場となり、文学や哲学の講義が行われた。ヘレニズム時代後期になると、体育に変わって文学の教育が優勢となる。前一世紀の文法は文法家「グランマティコイ」(grammatikoi) や修辞家のような専門家によってなされた。七自由学⁽⁹⁾として、「修辞学」、「弁論術」、「論理学」の三学 (trivium) と「音楽」―数学的音楽理論、「幾何学」、「算術」、「文学」の四科 (quadrivium) が重要な科目となった。

(二) ローマ教育

古代ローマ人にとって教育は基本的に個人の問題であった。したがって教育制度や文教政策に関する

公文書資料は殆どないか、あっても極めて限定的である。ローマ教育については当時のラテン文学者の諸作品、あるいは教育問題に言及するキケロ (Cicero, 前一〇六―一四三年)、タキトゥス (Tacitus, 五五―一一五年頃) などの著作を通して得られたものである。その意味で、ローマの教育はヘレニズム教育のラテン化にすぎなかった、といわてきた。

共和制以前のローマは農業生活を基盤にした家父長権社会であり、教育は家族の問題であった。教育者は家長であり、絶大な父権が付与されていた。しかし、幼児を養育したのは母親である。少年が七歳になると、母親に代わって父親が息子の教育を担うようになる。父親と行動を共にすることで、父の言行を学習し、読み書きも習った。実生活に必要な知識やローマの伝統を学んだのである。けれども、農業と戦争が生活の基盤であった以上、知的教育は脆弱なものであった。こうした古来からのローマ教育はヘレニズムの受容と共に転換する。領土の拡大を続けるローマはいや応なしにヘレニズム文化と接触し、ギリシア人教師がローマにやって来て居住するようになった。ラテン語で著作を著したのもギリシア人で、彼らはギリシア語とラテン語を教える教師となっていくことになる。

帝国の拡大は自ずと家族環境の変化を惹起し、父親の教育もあり方を一変させることになった。父親が息子の教育に専念できないため、誰かが父親の代理をしなければならなかった。初期の教師たちの多くはラテン語の熟達者であった。しかし、やがてローマが海外遠征で多忙になるとギリシア語を母語とするパエダゴーゴスがやってきて、ヘレニズム的教育を持ち込んだ。彼らの主要な仕事は、子どもへの保護・管理であり、ギリシア同様、ローマにおいても学校教師とは区別されていた。パエダゴーゴスの仕事は七歳になり、初等学校 (前三世紀) へ通学した。パエダゴーゴスの中にはギリシア的教

養の持ち主もいて、したがって、ローマの子どもたちがギリシア語を学んだのはパエダゴゴスからであった。ギリシア文学が重要視され始めると、子どもたちはラテン語を習得する前にギリシア語を学ぶことが奨励された。ただしパエダゴゴスの身分はあくまで奴隷にすぎなかった。中には自由を獲得して解放奴隷となり、独立して、学校を開くものも現れた⁽⁹⁾。

ローマの学校は三段階に分かれていた。初等学校は七歳で、文法学校は十一歳か十二歳で、修辞学校は成人の服を着衣できるとき、早ければ一五歳で入学できた。修辞学校は通常は二〇歳頃までだが、ときにはこれを超えて学ぶこともあった。文法学校や修辞学校に関する用語は殆どギリシアからの借用語である。したがって上級学校がローマ人にとって外来のものであり、ギリシア教師よつてもたらせられた。上級学校へ進学したのは一部に限られていて、多くは初等学校を修了すると一般社会に出て行つたと思われる。文法家の仕事の範囲は必ずしも今日の意味での「文法」を対象とせず、むしろ言語と文学で、特に詩文を解釈し、批評することであった。その意味でテキストに付随する歴史や自然科学の知識についても説明した。しだいに、文法学校は修辞学校の予備教育として文学研究に集中した。実際ローマの自由学芸 (*artes liberales*) はヘレニズム世界からの継承であった。

しかしながら、ギリシア語文法家がラテン語文法家の地位に取って代わることはなかった。両者は並存し、ローマ人は両言語を学習し、両言語による文学を研究したのである。

ローマ人は最初ギリシア人教師からギリシア語で修辞学を学んでいたが、前一世紀の前半までにラテン語の修辞学者も現われた。しかし一般的にはギリシア語修辞学校が優勢であった。帝政期の修辞学校は演説の訓練の場というより教養の場となっていた。ローマは二言語併用国家であった。したがって両

言語の学校は存続し続けた。とはいえ学校である限り、所詮ギリシア語学校の模倣であるか、応用にすぎなかった。ローマの教育で秀でたところは法学の才能であった。確かに、哲学や医学の面ではギリシア人に依存してはいたが、法学教育はローマ人独自の教育を発展させたものとなった。ラテン的教育の独創性はまさにこの法学教育にあるといつてよい。帝政期には法学研究は独立した学問となり、法学教師は、文法家の下で体験した詩人の研究方法を利用し、ラテン語による法学教育を完成した。ローマは学問の中心地となり、公立図書館が建設され、アウグスト帝の時代にはギリシア語とラテン語蔵書を個別に収蔵した二つの公立図書館も建設された¹⁰⁾。

三 ルネサンス期の教育

中世都市の誕生によって、修道院や教会で行われていた教育はルネサンスの変革、つまり都市の市民は神や教会を支えとする文化から離れ、世俗の世界観や倫理観を求めていった。古代ギリシアや古代ローマの思想が復興された。人間の生き方、フマニタスが学ばれた。古典ギリシア・ローマの著作の中に人間の新しい生き方を模索しつつ、写本の比較、検討、批判による近代的探求精神が出現した。ルネサンス人文主義の勃興はまさに古代ローマの著述家に加え、古代ギリシアの諸作家の研究を盛んにした。イタリアに興った人文主義はエラスムス (Erasmus, 1466～1536) によってイギリスやフランスに人文主義の拠点を形成していった。ルターが宗教改革を唱えたときも、既に人文主義と宗教改革とが結びつく素地は生成されていたのである。

ここではルネサンス期の思潮や人文主義に基づく教育の実態を具体的教育日課から観察し、その特徴を捉えたい。一例として宗教改革時期における教育課程を提示し、当時の学校教育の実情を知る手立てとしたい。

(二) ドイツのギムナジウム

ドイツでは一六世紀の中葉以降から、大学の予備教育機関(中等教育)としてのギムナジウムが整備拡大されていく。一五三八年にストラスブルクに設立された学校は、ドイツで初めてのギムナジウムといわれている。

ストラスブルクにおけるギムナジウムの教授案⁽¹¹⁾

学年 教科書

学習内容

一〇 ラテン語入門(ABC、文法)

読み、書き

ゴルの『子どもの教育』第一部

語形変化、動詞の活用

シュトゥルムの『若者』(ネアニスキ)

単語を覚える

ゴルの『ラテン語語彙集』

聖歌

ドイツ語の教理問答

九

ゴルの『子どものためのラテン語の教育』第一卷
シュトゥルムの『若者』（ネアニスキ）

第一〇学年生と同じ

ゴルの『語彙集』、キケロの『書簡集』第一卷
ドイツ語の教理問答

八

ゴルの『子どものためのラテン語の教育』第二卷
シュトゥルムの『若者』（ネアニスキ）

語形変化、動詞の活用

ゴルの『語彙集』

単語を覚える

キケロの『書簡集』第一卷

ドイツ語からラテン語への翻訳

ドイツ語の教理問答

聖歌

七

ゴルの『子どものためのラテン語の教育』第二卷

文法、文章論、韻律、

単語を覚える

ゴルの『語彙集』

ドイツ語からラテン語への翻訳

カトーの『格言詩』

聖歌

キケロの『書簡集』第一卷

教理問答、日曜日の福音

ゴルの『語彙集』

文法、文章論

キケロの『書簡集』第二卷

韻律、単語を覚える

『詩学』第一卷

ドイツ語からラテン語への翻訳

六

ゴルの『子どものためのギリシア語の教育』

アイソポス寓話集

ルターのレストラン語による小教理問答

日曜日の朗読（ラテン語とギリシア語）

作文（論証）

ラテン語の手紙の書き方

以下中略

一 シュトゥルムの弁証術配列（第三・四卷）

修辞学、弁証法

シュトゥルムの雄弁術配列（第三・四卷）

詩論

キケロの『演説集』

週に二度のラテン語の手紙を書く

ウエルギリウスの『農耕詩』あるいは

両語古典で書かれた

「アイネーエス」

抒情詩

詩学第六卷、ホメロスの『イリアース』（二冊）

単語を覚える

デモステネスの『フィリッポス弾劾演説集』

聖歌

イソクラテスの『演説集』

数学第二卷

アンドレーエのレストラン語による教理問答

使徒パウロの書簡

一瞥して看取できるのは、ことばの教育の重視である。教科書として、ホメロスやウエルギリウスと

いった古典作品が使用されると同時にシュトゥルムと彼の弟子テオフル・ゴルといった同時代の学者の著作も使われた。「読み書き」、「ドイツ語からラテン語への翻訳」、「ラテン語で書く練習」、最後に「ギリシア語を読む」ように配列されている。自然科学の教育は付随的に加えられているにすぎない。

(二) イエズス会のコレギウム

対抗宗教改革運動の教育として、カトリックのイグナティウス・デ・ロヨラ (Ignatius de Loyola, 一四九一―一五五六年) をあげることができる。彼はイエズス会を創設するが、修道会の中心的存在となる。イエズス会が信仰や教理を拡張するために採った手段は、プロテスタントと同じく、教育制度の整備と説教の重視である。イエズス会コレギウムの授業時間割草案の一つを取り上げる⁽¹²⁾。

第三文法学級

六時 三〇分間 ラテン語の会話

三〇分間 ラテン語格変化および動詞の活用の練習

三〇分間 ギリシア語の読解演習

九時 三〇分間 キケロと要理の概説を毎日交代で学習

三〇分間 ラテン語名詞の格変化および動詞の活用

一時 六時からの時限と同様

三時 六時からの時限と同様

第二文法学級

三〇分間 課題作文または話し合い

六時 三〇分間 ラテン語名詞の性と格変化

三〇分間 反復学習と格変化および動詞活用 of 練習

三〇分間 抜き打ちの課題作文

九時 三〇分間 キケロ

練習形式での反復学習、短い課題作文の準備

一時 三〇分間 課題作文の推敲・訂正

三〇分間 動詞の過去・過去完了形

三時 六時からの時限に同じ

三〇分間 ギリシア語

第二文法学級

六時 文法論の解釈と反復

三〇分間 既習の学習内容に基づいた課題作文

九時 ギリシア語

一時 午前中の課題作文の推敲、韻律の説明および詩の講読

時限終了まで、ラテン語の語句の意味内容について練習

三時 三〇分間 キケロ

三〇分間 ラテン語の格変化、動詞の変化などについて練習

三〇分間 キケロから既に学んだ表現について抜き打ちの書き取り

人文学級 詩人についての説明とその反復練習

六時 三〇分間 課題に基づく抜き打ちの作詩とその推敲を毎日交替で

九時 最初に二ヶ月は韻律学、その後はラテン語の歴史家の講読

一時 ギリシア語

三時 キケロ

抜き打ちの書き取り（ラテン語）

以下省略

イエズス会いのコレギウムは文法学級を三段階に区分し、その上に人文学級、修辞学級、哲学級と神学級に分かれていた。教授法は各学級の学習程度に即して内容の作文が毎日課されていること、記憶力を強化するため反復と復習が重視された。生徒の学習意欲を高めるための筆記による練習と口頭練習とが交互に配され、質疑応答や討論形式での実習・演習が行われていた。ここでもことばの教育が重視されている。キケロを中心にしたラテン語とギリシア語の学習は「読み書き」を基本とし、繰り返しと復習による記憶の修練が求められた。こうした学習を前提に作文と討論が続いた。

四 古代メソポタミアの教育

前三〇〇〇年期からの諸資料を取り扱うという点で、まず前述の諸資料とは大きな相違があることを確認しておく必要がある。われわれがここで取り扱う文字資料はメソポタミアの教育を再構成するに十分な資料を提供してはくれない。しばしば間接的で推測によらざるをえない場合すらある。しかし楔形文字の考案はその端緒から各時代の変容を受けながらも、各時代の正書法を確立ながら三〇〇〇年以上にわたって使用されてきた⁽¹³⁾。

しかもその使用範囲は古代オリエント世界つまり、アナトリア地方（ボガスキョイ）、シリア・カナイン地方（エブラ）、更にはエジプト地方（テル・エル・アマルナ）にまで及んでいる。これらの事実、明らかに楔形文字文化（とりわけ二言語併用、ときには三言語併用）とそれを担う教育の場が存在していたことを示している。ただし諸資料は各時代において、万遍なく現れるわけではなく、特定の時代（特に古バビロニア期）に集中していることも付け加えて置かなければならない。したがってわれわれの考察もこの時期の教育環境を中心にしたものになるが、しかしメソポタミアにおける教育の実態を把握するにたる多くの証左を与えてくれる。

（一）学校

通常、学校と訳されているシュメール語はエドゥバ（E-DUB-BA(A)）で、直訳すれば「粘土板の家」である⁽¹⁴⁾。学校とはいえ、しばしば行政の中心地を構成する建造物であったり、文書庫であったりす

る。僅かな場合もあるが、学校で練習用に使用された粘土板がウル、ニップル、ウルク、バビロンなどの都市から発見されている。にもかかわらず、残念ながらどの都市からも教育の場としての建造物（学校）と特定できるものは一つとして見つかっていない。サルゴン王朝やウル第三王朝時代の行政府は多くの書記の養成を必要としていたはずであるが、学校と思われる場所の特定にいたっていない。とはいえ、諸都市遺跡の現場から知られるように、纏まった夥しい粘土板の発掘や文書庫の存在は、多くの場合、書記の養成が個別の独立した学校としてよりは、種々の機能を併せ持った神殿や宮殿のような大きな構造物に付属する一部であったことを示している。都市遺跡の神殿や王宮にはほぼ例外なく多数の粘土板が出土している。これらのなかには重要な経済行政文書や裁判記録・契約書のたぐいが保管されていた。同時にその他様々なジャンルの文書（文学）が各地から収集され一定の場所で管理・保存されていた。これらの施設を図書館や文書庫（アーカイヴ）と呼んでいるが、両者の間に明確な相違が認められるわけではない。後代の図書館―例えば前4世紀前葉のアレキサンドリア―と違い、一般公開されることはなかった。その意味で公文書館の性格が強かったといえる。しかし個人の所有物として残された蔵書も発見されている。前一千年期のバビロニア・テキストを調べたところ、粘土板にアッカド語で書かれた三〇六〇名にも及ぶ書記の名前がわかった。そのうち二六八二人は一般庶民の個人のためのものであり、十一人は宮殿のため、また神殿のための書記は三六八人を数えた⁽¹⁵⁾。このことは前三千年期にはじまる書記の養成が伝統的にメソポタミア社会の要請であったことを示している。一個人から神殿に至るまで、つまりごく単純な書類の作成から、きわめて専門的な文学の創作に至るまで書記の活動を必要とする社会であった。

わけても宗教や広義の文学を収集し保存するためには書記の養成が必要とされたし、神殿や宮殿には社会の諸活動を記録し、書写する書記学校の存在が不可決であったのである。なかでもアッシシウルバニバル時代（前六六九～六二七年）のニネヴェは最大規模の蔵書を擁し、文学作品約五千点、書簡その他の記録文書は約六千点を数える⁽¹⁶⁾。こうした事例は神殿や王宮に付属した学校で書記の訓練と教育がおこなわれていた証拠となろう。

学校生活の日課について多くのことが分かっているわけではない。しかし既に出土している膨大な数の経済行政文書の粘土板の存在は明らかに書記術が都市国家とそれに続く帝国の存続に必須の職能であったことを示している。商取引に必要な会計帳簿や契約書の作成から様々な裁判に関する記録、神殿に奉納される献納物の記録簿の作成、私的あるいは公的書簡の作成、神殿や宮殿での行政に関わる書類の作成、さらには広義の諸文学の活動と管理など書記の要請は至る所にみられた。書記は権力の中枢から一般の庶民の生活にまで日常的に必要なとされた職能であった。したがって当初からメソポタミア文化は初級・高等教育を施された多様な書記によって維持され、発展してきたといえよう。

学校に通う生徒は概ね都市社会の富裕市民、つまり官僚や祭司職の子弟に限られていた。女子生徒の存在も知られているが、圧倒的に男子生徒で占められていた。学校での生活にくわえ、教師と親子の関係を書き記した興味深い粘土板が残されている。S. N. Kramerによって『学校生活』と命名されたテキストがそれである⁽¹⁷⁾。このテキストは古バビロニア（前二〇〇〇年期）の作品で、作者は学校の一教師であろう。学校で何をしたのか訊ねられる。教師と生徒の対話形式をとっているが、テキストの大部分は質問に対する応答にあてられる。

生徒よ、(若いころ) どこに行きましたか。

学校へ行きました。

学校で何をしましたか。(一―三行)⁽¹⁸⁾

これに彼の長い返答が続く。「粘土板を暗誦し、昼食を取り、粘土板を準備し、書写し、書き終わりました。それからわたしの手本とする粘土板がもってこられました。午後には練習用の粘土板がもってこられました。学校がひけると、帰途につき、家に入ると、父がそこに座っていました。わたしは父に書いた文章を読み、粘土板を暗誦しました。父は悦んでくれました。・・・朝早く目がさめると、母に向かつて言いました。『食事にしてください。学校に行くのですから』と。母は二つのロールパンをくれました。それから学校へ行きました。学校では監督がいました。『なぜきみは遅刻したんだね。』心臓をどきどきさせながら、わたしは先生の前に立ち、うやうやしくお辞儀をしました。』⁽¹⁹⁾
学校生活は厳格で、生徒はつねに鞭を手にした教師等をまえに学習をしいられていた。

教授はわたしの粘土板を読んでいわれた。

『脱字があるようだね。』わたしを鞭打ちました。(二五―二六行)

行儀が悪いと鞭打たれ、許可なくお喋りをしたといって鞭打たれる。書写した字がよくないといって

は鞭打たれもした。学校では既に日常的には死語になっていたシユメール語が必須の言語として使われていた。シユメールを話すことができなかったこの生徒は先生にこう言われる。「おまえの手は不十分である」⁽²⁰⁾ つまり落第を宣告される。教師の権威は絶対的であった。とはいえ、この生徒は、どんなに教師に嫌われようとも、書記になることがどんな特権を享受できるか熟知していた。このテキストでは生徒は父親に対し手厳しい教師を家庭に招いて食事を振る舞い、贈り物をするようにし向ける。「父親は息子の言ったことに心を留める。先生は学校から連れ出され、家に入ると上座の椅子に座らされる。その生徒はやって来て先生に給仕をする。書記術について学んだことはなんであれ、父親に説明した。」⁽²¹⁾ ことはうまく運んだようだ。父親は喜びに満たされて息子がいかに多くの書記術を学習したかを教授に告げる。帰りしなには香油で満たし、新しい着物を着せ、指輪を贈るとともに、なにがしかの心付けを持たせる。こうして教師はご機嫌になり生徒にこういう。

若者よ、おまえはわたしのことを嫌がらず、無視もしなかった（ので）、

おまえは始めから終わりまで書記の技術を会得できたと思う。

おまえは惜しみなく何でも与え、わたしの仕事以上の給与を支払い、わたしに敬意を払ったので、ニサバ⁽²²⁾、守護女神がおまえの守護神となりますように。おまえのためにおまえの筆の先が上手に書くことができるように。

おまえの練習には間違いはないだろう。

兄弟（仲間）たちのなかでおまえが指導者となろう。

友人たちのなかでおまえが長になろう。

卒業生のなかでもおまえは最優秀の生徒の列にも入るだろう。

・
・
・

おまえは学校生活もよくやったし、もういっぱしの学者だよ。(七〇～八九行)

この作品は典型的なエドゥバにおける学校生活を叙述したものと考えられる。鞭を手にしている教職者たちを除けば、今日の学校生活とあまり変わらないといえるかもしれない。都市社会はエリート養成を必要としていたのである。都市の発展のなかでエドゥバが多様な職種に就く書記たちの養成を求められていたのも必然であった。

(二) カリキュラム⁽²³⁾

最古の楔形文字資料が最初に発見されたのはシュメールの古代都市ウルクである。出土した文書はウルク後期、つまりウルク第Ⅳ層(前二七〇〇年)からで、種々の文書の中に文字リストが混在していた。これらは語彙集といわれ、書記になるために生徒たちが練習用に書き残したものであったことが分かっている。それぞれのリストには一つのテーマが割り当てられている。鳥類、魚類、樹木、木製品、等である。こうした文字リストは書記養成のためファラやアブ・サラビクにおいても前三〇〇〇年期末まで使用された。同種の語彙集は、南部メソポタミアに限らず、周辺地方、東は古代エラムの首都スサさら北西のエブラ王国にまで広範囲にわたり使用されていた。更に近年のこの種のリストは実用的語彙や楔

形表語文字（記号）の語彙集を含んでいる。新しい一連の語彙集、多くの地方による校訂語彙集とともに、前二〇〇〇年期の早い時期、おそらく十一世紀頃に登場した。そしてこれらのテキストは正典化（標準化）されるようになる。これらはいたるところで書写され、楔形文字の使用が終焉を迎える紀元後三〇〇年頃まで用いられた。

A 言語教育

前二〇〇〇年期は一般的にアッカド語つまりセム語が使用されていた。しかし古バビロニア期のエドゥバではシュメール語で教育が施された。「シュメール語を知らない書記は、どんなふうにして正確に



図 一



図 二

翻訳するのでしょうか。」「シュメール語を知らない書記とは、どんな書記なんでしょうか。」既に死語となっていたシュメール語であったが、エドゥバにおいてその修得は必須であった⁽²⁴⁾。言語教育がエドゥバ教育の原点であり、書記術の基本であったということが出来る。したがってエドゥバ教育は語彙の練習から始まった。今日エドゥバで書写された多くの練習帳が発見されている。粘土は格好の書材であった。メソポタミア河岸では良質の粘土が至る所で採取される。手のひらサイズの粘土を取り、捏ねてから平たく延ばすと簡単にレンズ型、四角形や長方形型の粘土板ができあがる(図一〜四)⁽²⁵⁾。その上に葎の先を三角形や丸型に加工した筆記具で形状の異なる楔形押印痕をつけていった。初歩の日本語学習のように、教師が手本を示し、それを生徒がまねて文字を練習する。他の例として、左半分に教

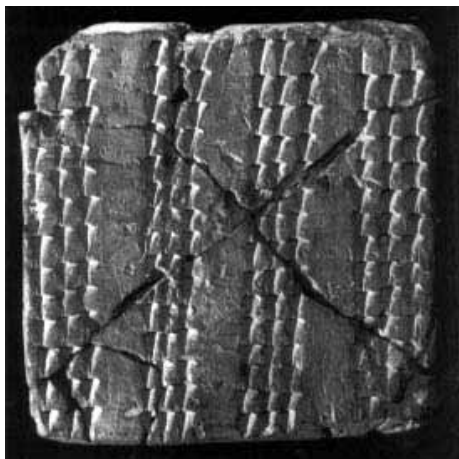


図 三

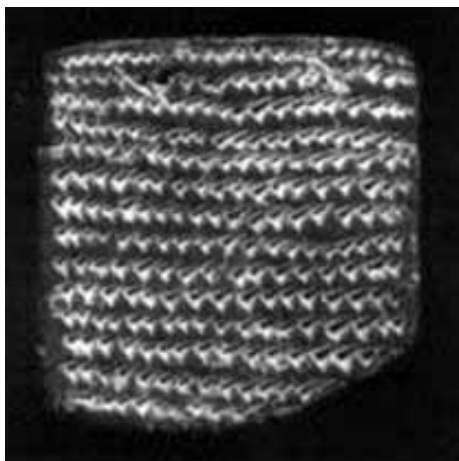


図 四

師の手本（讃歌や文学の一部分）が書かれ、右には生徒がそれを手本にして書いては削り取り、また書いては削り取って練習をしたものもある（図五）。

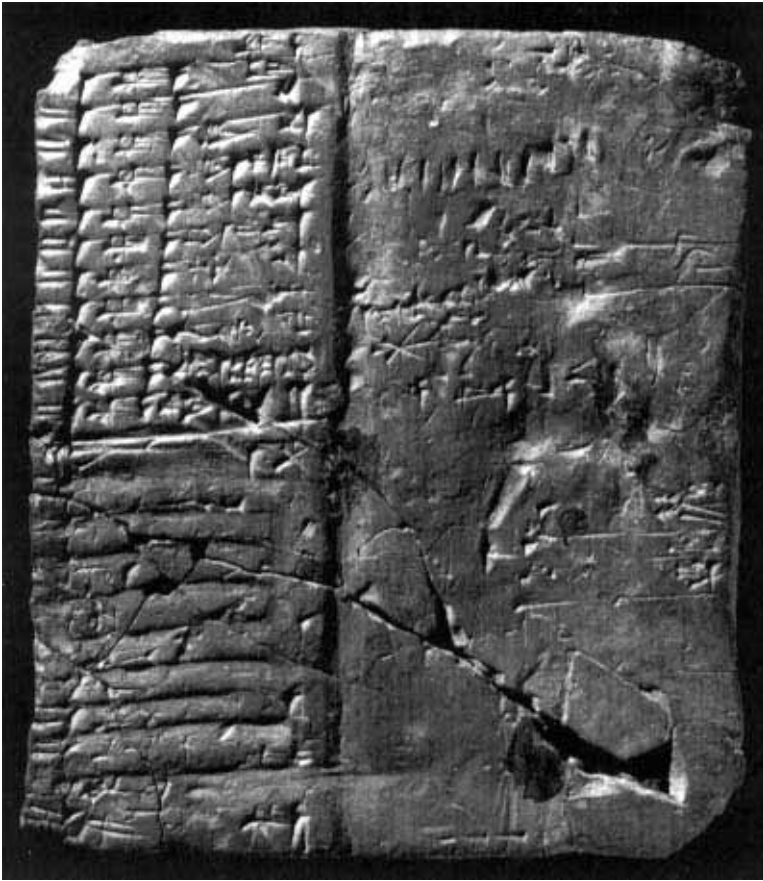


図 五

裏面は手本を見ずに練習するために利用されたり、別のより長い語彙集の抜粋が書かれたりした。エドゥバではこうした書写作業が繰り返し行われていた。更に、エドゥバでは入門編として使用される音節文字表から実用・専門編として使用される様々なタイプの語彙集が作成されていた。

1 ツ・タ・チ (tu-ta-ti)

最初は楔形文字の基本的な発音と書き方を学習する。慣習的に書き出しの一行目を取ってそう呼称されるツ・タ・チ (tu-ta-ti) 音節文字表が残されている。この音節文字表は始め音節 tu-ta-ti と弁別されて書かれ、次に一語 tutati のように書かれる。これに続いて nu-na-ti; nunani, bu-ba-bi; bubabi と音節ごとに配列される。およそ八〇の音節が取り上げられ、続いて人名のリストが配置される。さらに木と木製に関する語彙から始まる主題別のリストから構成される。

2 音節文字表 a-a-u-me-me

次の段階では極めて簡便なシュメール語彙集の学習をする。研究者によつて音節文字表 A と B とも命名されてきた。語彙集の学習に先立ち、音節文字表が書記養成の早い段階で使用されていた。よく知られたものとして、音節文字表 A は一枚の書板に約四〇〇行からなり、B は二枚の書板に全部で七四三行に書かれている。これらのリストは古バビロニア時代以後書記教育の重要なものになった。「a-a (音節文字表) を描くことのできないものが、どうして流暢な会話に到達するでしょう。」⁽²⁶⁾ シュメール語の修得の能力が会話や演説にとつても必要であると見なされていた。

3 一群のエア (EA) 語彙集

この段階では表語文字集を修得しなければならない。この種の語彙集の目的は簡単な楔形文字にその読みとアッカド語の意味をつけることである。短縮板はエア＝ナーク (EA = *nâqu*) と呼ばれ、八つの粘土板に二四〇〇項目が記載されている。そのうち七〇パーセントほどが残されている。この元々の語彙集エア＝ナーク (AA = *nâqu*) はシュメール語とアッカド語による音節文字表であり、四二の書板におよそ一四〇〇〇もの項目を有する膨大なリストである。シュメール語 (表語文字) の読み方とアッカド語 (音節文字) の意味が示されている。語彙リスト AA = *nâqu* は前十二世紀頃に標準化されたが、あまりの膨大な語彙のゆえに、縮約版が作成された。それが EA = *nâqu* 語彙集である。最もよく整っている例を引用しよう。

<i>ga-na</i>	GAN	<i>ga-mu-u</i>	<i>eq-tu</i>
<i>ka-ra</i>	KÂR	<i>ga-na-te-mu</i>	<i>na-pa-hu ša mē</i>
<i>ri-ib</i>	KAL	<i>gu-ru-šu</i>	<i>šu-tu-qu</i>

左から「読み」(発音) は *gana* で GAN は「シュメール語による楔形表語文字」を表し、*ganû* と呼ばれ、「アッカド語の意味は」 *eqtu* 「耕地」である。他の二項目は順に、「きらめく」(原意は水の光)、「勝る」を意味する。今日の類語辞典に近い。シュメール語の楔形文字は一文字から構成させる単語 (表語文字) であるため、セム人 (アッカド語) が楔形文字を採用するさい、音節文字で表記し、学習する必

要があった。

この種の語彙リストの前史にプロト・エアと呼ばれるものがあり、 $EA = n\acute{a}qu$ の原型とされている。文字の形態、つまり楔形文字のストロークを形態順に並べたリストである⁽²⁷⁾。同種の最も古い例は、初期王朝時代第三期ファラ時代（前二六〇〇年頃）にまで遡及する。語彙集とはいえ、単に表語文字だけが並列されていて、発音すら指示されていない場合もある。既にこの頃の話しことばはアッカド語であったが、その意味はほとんど訳出されていない。その理由は教育方針に求められる。古代メソポタミアの学校の学習システムは後述するとして、当時の学校では教師が楔形文字（シュメール語語彙リスト）の読み方（発音）や意味を口頭で説明し、生徒はそれをいわれた通り暗記し、口頭でアッカド語に翻訳するという教育が行われていた。

4 デイリ・シ・アIIアトウル (DIRI:SI.A = *atru*) 語彙集

目的としてはエア語彙集に類似している。表記方法も $AA = n\acute{a}qu$ に類似しているが項目が複合語である点で異なる。その読みが個々の表語文字からでは類推できない複合表語文字に限定されている。つまり一つの表語文字ばかりでなく、いくつかの表語文字を組み合わせた複合語の語彙集である。DIRI:SI.A = *atru* は六の書板に約二一〇〇の項目をもつ。

ごく僅かであるが、重複や限定詞のあるものと欠落しているものも含まれる。

5 語彙リスト⁽²⁸⁾ ∴ ウルラIIフブル (UR₂-ra = *hubullu*)

書板	内容
第I-II	法律・行政に関わる術語
第III	樹木
第IV-VII	木製品
第VIII-IX	葦と葦製品
第X	土器と粘土
第XI	皮と皮革製品、銅
第XII	青銅、銀、金
第XIII	家畜
第XIV	野生動物
第XV	肉の部位
第XVI	石材
第XVII	食物と野菜
第XVIII	魚と鳥
第XIX	織物
第XX-XXII	地名と星
第XXIII	食べ物と飲み物

なかでも主要な教育的語彙集は、ウルラ＝フブル (UR₂-ra または Aa.HAR.ra = hubullu) で、二四の書板からなるシリーズものである。およそ九七〇〇の項目をもつ百科事典的リストである。前述したウルク出土の最古の粘土板文書の中にも類似する語彙リスト、つまり生徒の練習板の存在が知られている。項目の序列について整合性を求めることは困難であるが、明らかに意味論的・主題別に分類されている。一〇〇〇項目に近い語彙が収録されていることは当時の都市社会が既に成熟していた文化生活を営み、整備された官僚制度体制の存在を前提にしていたと考えられる。

6 その他

主題別な語彙集としてル＝シャ (LU = ša) がある。四枚の書板に職業に関わるもの、血族関係に関するもの、様々な人間活動に関するもの等、およそ一三〇〇項目が上げられている。

シグ アラン＝ナブニトゥ (SIG⁷ALAN = nabunitu) はセム語語根の語形成に順じて配列された、語源的シュメール語・アッカド語語彙集で、三二の書板におよそ一〇五〇〇項目が記載されている。

エリムフシュ＝アナントゥ (ERIMHUŠ = anantu) とアンタガル＝シャクー (ANTAGAL = šaḡu) は三つの語群について同意語ないし意味上関連する項目を記載したリストである。

語彙集には一言語 (シュメール語のみ) によるもの、二言語併用 (シュメール語・アッカド語) によるものが基本であるが、三言語併用 (シュメール語、アッカド語、ヒッタイト語) や四言語併用 (シュメール語、アッカド語、ウガリット語、フルリ語) のものも認められる。

僅かながら文法に関する練習や手続き上のテキストがある。前一八世紀にはシュメール語テキストをアッカド語に翻訳するさい、あるいは新しいシュメール語によるテキストを作成するさいに役立つ、広範囲にわたる動詞の語形変化表も残されている。新バビロニアの時代になると文法的諸要素、例えば接辞に関するリストも現れる。

B 法律用語や書簡にかかわる教育

エドゥバでは言語教育における語彙集の習得とともに専門職に向けた教育が行われていた。そのひとつが *ana itišu* で、律法、法律、行政に関する用語に関する名文集である。これはシュメール語で書か

れ、バビロニア語の翻訳付きであった。イシンにおける有名な殺人罪で起訴された人の公判が古バビロニアのエドゥバで使用された。判例集の縮小版である「契約に関する雛形」もエドゥバで教えられていた。いわゆる法典も学習されていた。リピット・イシュタル、エシュヌナ、ハンムラビ法典のコピーや断片がエドゥバで発見されている。法律用語や法典の存在は当然のことながら裁判手続きが組織的に実施されていたことを前提とする。弁護士に相当する書記の訓練が行われていたかどうか不明ではあるが、法律用語のなかに将来の職種として裁判官⁽²⁹⁾の書記に言及されている。古代メソポタミア文化の特徴のひとつはその風土と文字の誕生によって都市国家の成立とともに法と契約による支配が徹底していたことが挙げられる。したがって書記学校においても法律や行政に関する用語の学習は必須であったのである⁽³⁰⁾。

書簡の作成もエドゥバで教えられた。古バビロニアのエドゥバでは生徒は書記の母語であるバビロニア語で手紙を書く訓練も受けていた。古バビロニア語の書簡体で練習をした粘土板がニップル、シッパル、ウル等で発見されている⁽³¹⁾。

C 数学と測量

数学用語が古バビロニアのエドゥバ テキストに認められる。エドゥバで実施された試験に関するテキストを検討してみよう。今日この種のテキストはA~Dまで刊行されている。ここでは Examination Text A⁽³²⁾ として知られるテキストを取り上げる。

(1) 書記は生徒に試験を実施して、(言われた)。

(2) 「教授陣の前に、エドゥバの中庭で、

(3) わたしの足下に座りなさい。わたしはおまえにあることを言おう。そしておまえはわたしに報告するだろう。」

(3a) …わたしはおまえに言おう。そしておまえはわたしの耳を開くだろう。

(4) 子どもの頃からおまえが成人するまで、おまえはエドゥバに座ってきた。

(5) (しかし) おまえは学習してきた書記術の“記号”を知らない。

(5a) 書記術をおまえは学習してきた。しかし、おまえはおまえの“記号”を知らない”。

(6) 「何をわたしは知らないのですか。」

(7) 「何をおまえは知っているのか。」

(8) 「さあ、わたしはおまえに質問しよう。おまえはわたしに話すだろう。わたしはあることを言う。そしておまえは答えるだろう。」

(9) 「お訊きください。そうすれば、わたしはあなたに言います。お話してください。そうすれば、あなたにお答えいたします。」

(10) 「おまえはわたしに答えることができないだろう。」

(11) 「どうしてあなたに答えることができないことを望まれるのでしょうか。」

(12) 「書記術の始まりは(楔形文字の)一画です。これは六つの(異なる)意味があります。(また数を意味する)六〇です。おまえは(この一画)の名称を知っているか。」

(13) 「おまえが『秘め事』についてシュメール語で学習してきた全てを、おまえはどう説明するか知っているか。

(14) おまえは知っているか。翻訳、置き換え⁽³³⁾、アッカド語の接頭辞、シュメール語の接尾辞、アッカド語の接尾辞、シュメール語の接頭辞を。

(15) おまえは知っているか。シュメール語の同意語、反意語、拘束(語)⁽³⁴⁾を。…アッカド語の三組、そして一致していないものをいかにして調和させるかを。

(16) おまえは知っているか。未来形、現在形、過去形、逆形、挿入辞、*marû*、*hamû*⁽³⁵⁾が何であるかを。

(16a) おまえは知っているか。未来形、現在形、過去形、逆形、挿入辞、*marû*、*hamû*…が何であるかを。

(17) おまえは知っているか。わたしと、おまえと、彼ら…⁽³⁶⁾。

(18) おまえは知っているか。書記術の粘土板は…アッカド語、上のものを覆い、下のものを見ること…を。

(19) おまえは知っているか。標準の、逆順の、斜線の、極細の文字を。

(20) おまえは知っているか。アッカド語の対応するシュメール語を。

(21) おまえは知っているか。奉納祭司、浄化祭司、塗油祭司の専門用語を。

(22) …写し…。

(23) おまえは知っているか。…整える…を。

(24) おまえは知っているか。歌い手の歌、英雄の歌、呪文祭司の歌、…を。

おまえは知っているか。どのように韻文を分節するかを、…繰り返し句と結尾を暗誦するかを。

(25) おまえは知っているか。多種多様なアッカド語の専門語を、金属細工人のことばを、彫刻人のことばを。またおまえは彼らのことばを理解することができるか。

(26) おまえは知っているか。彼が組み合わせる「話し手」のことばを、牡牛飼いのことばを、雌牛飼いのことばを、船乗りのことばを。おまえは彼らのことばを理解することができるか。

(27) おまえは知っているか。掛け算、逆数、分数、係数、簿記、会計監査、あらゆる種類の分配、財産分与、耕地分割を。

(28) リラ、ハープ ……―楽器⁽³⁷⁾の「多様な部位」を、あるだけ全部、おまえはどのようにしてそれらを名称によって確認するか知っているか。」

(29) 「わたしはこれらのことは教授から聞いていませんでした。…（それらは）わたしのここにありません。

(30) あなたはそれらをわたしに話しませんでした、わたしの助手はわたしに話しませんでした。

(31) わたしが知っていることは、わたしがあなたに話したことです。」

(32) 「おまえは何をやってきたのか。そしておまえはなぜずっとここに座ってきたのか。

(33) おまえはもう青年期を終えた。もう殆ど成人に近い。

(34) 老いた牡牛のように、おまえはわたしの教えに従わない。

(35) 枯れた麦のように、おまえはもう良い季節を逃してしまった。

(36) おまえと一緒にいる人の後におまえは従わなかった。おまえは同僚たちに続かなかった。

(37) 知恵を持つておまえは話さなかった。知識を持つておまえは話さなかった。

(38) 知恵のことばはおまえに憑いた病に似ている。…。

(39 行欠損)

(40) …もはや子どもではない。

(41) どれほどおまえは遊んでいるのか。

(42) どれほどおまえはスポーツをするのか。

(43) どれほどおまえは…備えるのか。

(44) どれほど物を壊し続けるのか。

(45) どれほどおまえは耳が聞こえないのか。

(46) どれほどおまえは顔を赤らめているのか。

(47) …おまえは恐れない…。

(48) おまえは頑なで、注意を払わない。

(49) おまえは緊張してはならない。怠慢であつてはならない。

(50) これは試験である。おまえは不満を言つてはならない。

(51) そんなに取り乱すな。そんなに咳をしてはならない。

(52) おまえの口のことばを…いっぱいにしてはならない。

(53) おまえの耳が門に向けられたいように。

(54) 座りなさい。そし書記術については謙虚でありなさい。

(55) 昼も夜もおまえのこころをそれ（書記術）に関心を向けなさい。

(56) 書記術は幸運である。書記は王宮の天使をもつ。

(57) 彼と共に、…輝く眼差し、そして…王宮に達する。」

このテキストの約半分ほど、つまり一行から二〇行ほどは言語教育に係わる対話に割かれている。続いて多種多様な職業の専門用語の学習に言及している（二一行、二五行―二六行）。数学や測量については「おまえは知っているか。掛け算、逆数、分数、係数、簿記、会計監査、あらゆる種類の分配、財産分与、耕地分割を（27行）」に明瞭である⁽³⁸⁾。夥しい数の経済行政文書が出土していることから明らかに、古バビロニア時代はすでに高度な官僚機構が確立していた。諸都市の経済活動は活発であり、会計帳簿を正確に管理できる多くの専門家が必要であった。それに伴い土地や耕地などの不動産取引や課税の基礎となる諸土地の測量も必要条件の一つである。諸工芸品に携わる職人たちも相応の数学の知識が必携であることも想像に難くない。

C 音楽教育

音楽教育もエドゥバにおける重要な教育であった。前項の『試験テキストA』において様々な歌が歌われたことが窺われる。「おまえは知っているか。歌い手の歌、英雄の歌、呪文祭司の歌、…を。おま

えは知っているか。どのように韻文を分節するかを、…繰り返し句と結尾を暗誦するかを（24行）。ここに列挙されている歌は宮殿や神殿に仕える祭司の歌唱が前提されている。当然存在したであろう恋愛歌などの世俗的歌は含まれていない。書記たちは一般民衆のレベルでの活動にはほぼ関わらなかった。彼らの職種は確かに多様であったが、所詮専門職に携わる官僚（ここでは祭司）の域を出なかった。「リラ、ハープ ……楽器の「多様な部位」を、あるだけ全部、おまえはどのようにしてそれらを名称によつて確認するか知っているか（28行）。リラ（竖琴）、ハープ、リュートなどの弦楽器の他、太鼓、角笛ラッパなどの楽器が使用された³⁹⁾。メソポタミアでは合唱に楽器の伴奏が就いていて、踊り子のダンスも加わり、さながら今日風のオペラの上演と類似するかもしれない。祝祭、葬送儀礼に音楽は欠かせなかった。アキトゥ新年祭などの式文⁴⁰⁾において第四日目に天地創世神話（エヌマ・エリシュ）が朗誦され、オペラ風に上演された可能性は高いといわれている。

D エドゥバに関する対話テキスト

シュメール文学には対話形式を取る文学ジャンルがある。アダミン・ドゥッガ (adamin-du-ga) と呼ばれ、大抵はお互いが言い争い自分の長所などを主張し合う形式をもつ。既に前述したテキストの始ども対話形式で残された文学である。エドゥバの学校教育に典型的な対話テキストを三例取り上げ、エドゥバにおける教育生活を更に検討することにする。これらの対話は古巴ビロニア時代の学校の構成、そのカリキュラムと成果などを明らかにしてくれる。選ばれた三編の対話はそれぞれに個性をもち、書記としての技術や知性をとどころ皮肉や冗談と織り交ぜながら書かれた文学としても興味深い⁴¹⁾。

『二人の書記の対話』

明らかに二人の書記うち一方は他方より先輩 (sēs gal “Big Brother”) ⁽⁴²⁾ である。両者の間の競い合いが対話形式で展開される。書記の名前が記されている点で際だつテキストである。

ギリネ・イサグ

(1) 「おい、おまえ、今日、わたしたちの粘土板の裏に何を書こうかね。」

エンキ・マンスム

(2) 「今日、わたしたちの授業では一語さえ書いていません。」

ギリネ・イサグ

(3) 「でも、あとで先生は確かに知って、わたしたちを怒るでしょう、おまえのせいで。」

(4) 彼 (≡ 先生) になんと言おうか。」

エンキ・マンスム

(5) 「さあ、お出でください。私は書きたいことを書きましょう。わたしが課題を出しましょう。」

ギリネ・イサグ

(6) 「おまえがわたしに課題を出しても、わたしはおまえの助手 (Big Brother) ではありません。」

(7) どうしておまえはわたしの助手としての身分を侵害するのか。

(8) わたしは書記術においては秀でるものとなった。助手の務めは怠り無く果たしている。

(9) おまえは理解が遅く、聞くことも難しい。学校ではおまえはただの見習いに過ぎない。

(10) おまえは書記術に耳を貸さず、シュメール語には黙ったままである。

(11) おまえの手は自由がきかず、筆記用葦には向いていない。

(12) 粘土板にも向いていない。(おまえ)の手は口についていくことができない。

(13) おまえはわたしのような書記でありえようか。」

エンキ・マンスム

(14) 「どうしてわたしはあなたのような書記でなければならないのでしょうか。」

(15) 18行は欠損あるいは断片的

ギリネ・イサグ

(19) 「おまえは粘土板に書いたが、その意味を捉えることができない。

(20) おまえは手紙を書いたが、それがおまえの限界だ。

(21) 行って地所を区分けしなさい。ところが、おまえは地所を区分けすることができない。

(22) 行って耕地を分与しなさい。ところが、おまえは紐と棒を的確に留め置くことができない。

(23) 耕地の杭をおまえは配置することができない。おまえはその形状が分からない。

(24) したがって、不当な取り扱いを受けた人が喧嘩をしても、おまえは平和をもたらすことができない。

(25) かわりに、おまえは兄弟が兄弟を攻撃するままにしておく。

(26) 書記たちの中で、おまえだけが粘土に向かない。

(27) おまえは何にむいているか。誰か「教えてくれる者」はいるだろうか。」

エンキ・マンスム

(28) 「どうしてわたしには何もとりえが無いのですか。

(29) 行つて地所を区分けするとき、わたしはそれを区分けすることができます。

(30) 行つて耕地を分与するとき、わたしはそれらを分与することができます。

(31) ですから、不当な取り扱いを受けた人が喧嘩をしたなら、わたしは彼らの心を静め「……」。

(32) 兄弟は兄弟と平和で、彼らの心は「……」。

(33) 58行は欠損あるいは断片的

ギリネ・イサグ(?)

(59) 「機織娘の日ごとの割り当てを足したり引いたりすること、

(60) また見習い金属細工人の仕上げの順序について、わたしはその手順を知っている。

(61) わたしの父はシュメール語を話します。わたしは書記の息子だ。

(62) でも、おまえは卑しむべき者、無教養な人の息子だ。

(63) おまえは粘土板の形を整えることができないし、練習用の粘土板を捏ねることもできない。

(64) おまえは自分の名前すら書くことができない。粘土はおまえの手に相応しくない。

(65) 叩き切るのをお止めなさい。おまえが巧みに使っているのは鍬なのか。

(66) 抜け目ない愚か者、おまえの耳を覆いなさい、それらを覆いなさい。

(67) わたしが話しているとき、おまえはシュメール語を話すふりをしているのか。」

エンキ・マンスム(?)

(68) 「どうしてあなたはわたしに『おまえの耳を覆いなさい、それらを覆いなさい』と何度も繰り返し返えされるのですか。」

(68) 133行は断片的

(134) 「どうしてあなたはこのように振舞うのですか⁽⁴³⁾。」

(135) どうしてあなたは互いに押し合うのですか。互いに向かつて侮辱を投げつけ合うのか。

(136) あなたは学校で大声を上げます。

(137) わたしは要求どおりシユメール語を教えました。」

(138) 139行は断片的

(140) 「ずっと昔の過ぎ去った日々のこと、あなたがさらに打たれ、そして「…」た時も、

(141) (このように) 叫び声はわたしに届きませんでした。

(142) なぜ、あなたの「助手」である彼に。

(143) 誰があなたより書記術についてもっと知っていましたか。

(144) どうしてあなたは彼にそこまで横柄に話し、

(145) そして彼を呪い、かつ侮辱するのですか。」

(146) 何事も知る教師は⁽⁴⁴⁾

(147) 顔をしかめ、厳めしく『好き勝手にするがいい』(と言われる)。

ギリネ・イサグ(?)

(148) 「もしわたしがほんとうに好き勝手にできたとしたら、

(149) それにおまえのように振舞い、彼の「助手」を攻撃する者は、

(150) わたしは彼を鞭で六〇回打った後で、

(151) 彼の足に足かせし、

(152) 彼を家に監禁したので、彼は二ヶ月間も外出できない。

(153) おまえ（あるいは彼）の悪事は確かにいまだ償われていない。」

(154) 今日以降彼らの眼は（憎しみ）の眼差しで見つめる。

(155) 人は他者に意地悪く振舞う。

(156) 兄弟は兄弟と争い、彼に挑戦する。

(157) 口論しているエンキ・マンスムとギリネ・イサグに、彼ら両者に、

(158) 先生が公正な判断を下されることでしょう。

(159) ニサバを誉め称えよ。

『監督者と書記の対話』

前述のテキストに見られる先輩（助手）と後輩の口論と異なり、ここでは先輩ではなく、監督官（UGULA）と書記の対話である。

（監督官）

（1）「（かつての）生徒よ、こちらにおいて、早くわたしのところにおいて。

（2）わたしの先生が教えたことを、わたしはおまえに教えよう。

(3) おまえのようにわたしはかつて若者で、助手がいた。

(4) 「先生」は他の者からわたしを選んで、そしてわたしに課題を課した。

(5) 揺れる葦のように、わたしは震えた。しかしわたしは勉学に専念した。

(6) わたしの先生の「ことば」を、わたしは忘れなかった。わたしは………かった。

(7) わたしの助手はわたしの（仕事）の割り当てに大喜びだった。

(8) わたしの謙遜な態度は彼をとて満足させたので彼は…話した。

(9) やるように命じられたことは何でも、わたしは行なった。そしてすべては常に相應しいところ

ろに落ち着いた。

(10) 彼の忠告から愚か者だけが離れる。

(11) 彼は粘土の上のわたしの手を適切に指導し、そしてわたしに真つ直ぐな線を維持させた。

(12) 彼はすべての言葉にたいしてわたしの口を開き、彼はわたしに（折に適った）助言を指示された。

(13) 彼は正確に課題を果たした彼の基準でもってわたしの眼を満たした。

(14) 熱意は選任されたもの分け前である。時の浪費は恥ずべきことである。

(15) 勉学の場に遅れる彼は、彼の義務を無視することになる。

(16) 人は自分の知識を称賛すべきではない。しかし人のことばは掌握すべきである。

(17) 人が自分の知識を素晴らしいと称賛するなら、人々は驚いて彼らの眼を上げる。

(18) その日を無駄に過ごすな。夕刻に休息するな。この瞬時にも勉学に励め。

(19) 卒業生も新入生も不謹慎に陥るかもしれない。

(20) ……おまえのことばは真剣でなければならぬ。

(21) 二度と、おまえの信頼をおまえ自身の開かれていない目に置くな。

(22) それゆえ、おまえは大いに服従を蔑視したことだろう。それは人間らしさの名誉なのに。

(23) 「謙遜な人」は平安なところをもち、その人の罪は無罪とされる。

(24) 貧しい人の才能は全ての知性にとって名誉に値する。

(25) いまだ何を持たない者でさえ、犠牲の子羊を胸に跪いて、抱いている。

(26) 生存する権力者たちに膝を屈め、そして自分自身自制すること、それが私を満足させることなのである。

(27) これらのことをわたしの教師はわたしに教えたのである。わたしはそれらをおまえに復誦した。それらを軽蔑するな。

(28) 注意しなさい。これらのことをここに受けとめなさい。このことはおまえの利益になることだろう。」

(29) 学習した書紀はうやうやしく彼の師に答えた。

(書記)

(30) 「今あなたは朗誦しました、呪文のように。わたしはあなたにそれに返答をいたしましたよう。

(31) そしてあなたの牡牛のような「甘美な歌」にその反論を（いたしましょう）。

(32) あなたはわたしを無知に変えられないでしょう。わたしは一度だけ答えましょう。

(33) かつては子犬（でしたが）、いまやわたしの眼は大きく開いています。わたしは人間らしく振舞っています。

(34) それなのに、なぜあなたはわたしに規律を設け続けるのですか。まるでわたしが怠け者であつたかのように。

(35) あなたのことに聴く者たちは、わたしを罵ることでしょう。

(36) あなたがわたしに書記術について明らかにしたことは何であれ、あなたにお返ししてきました。

(37) あなたはわたしをあなたの家族に指名しました。あなたは一回なおざりにしたことでもわたしを非難できません。

(38) わたしはいつも娘奴隷、奴隷、とあなたの家族の他の働き人の仕事を割り振りました。

(39) わたしは彼らのところを食べ物や衣類と油の分け前で宥めました。

(40) わたしは彼らの仕事の順序を割り当てました。（こう）言われる。

『主人の家では使用人を追うな。』

(41) しかし毎朝、わたしは行いました。わたしは羊のように彼らの後を追いかけてました。

(42) あなたは捧げ物の準備を命じました。そして同じ日にわたしはあなたのためにそれを果たしました。

(43) わたしは専門家のように羊と祝宴の準備をしました。ですからあなたの神は大喜びでした。

(44) あなたの神の舟が到着した日に、それは大きな敬意をもって迎えられました。

(45) あなたはわたしに耕地の端に行くよう命じました。そこでの労働はもう骨の折れる労苦でした。

(46) 労役の競い合いでは休息も、夜も、昼もありませんでした。

(47) 日雇い労働者たち、つまり農夫の息子たちが一番強かったです。

(48) わたしはあなたの耕地を改良しました。けれども人々は「あなた」を称賛します。

(49) それでも、上手く牡牛に向く仕事を、常にわたしはもつと取り入れました。彼らの重荷「…」。

(50) わたしの若かりし頃からあなたはわたしを監視し、そしてわたしのやり方を点検しました。

(51) わたしは見事な金属のように磨かれています。よりよい成果は「ありません？」。

(52) わたしは大きなことばを使いません、あなたの誤りであるような。わたしはあなたに仕えています。

(53) 自分を低くすることは人に無視されることです。したがって、わたしは（わたしの真価を）あなたに明確にしたいのです。このことを学んでください。」

（監督者）

(54) 「以前は おまえは子どもに過ぎなかった。さあ、おまえの頭をもたげなさい。

(55) おまえの手は成人になった。さあ、（おまえ自身の）仕事を実行しなさい。」

(56) この祝福の祈りを受け入れなさい。「幸？」運をわたしは宣言しましょう。

- (57) おまえの助言はわたしの体の奥まで染み入りました。まるで乳と油を飲んだかのように。
- (58) 「おまえの」 絶え間ない仕事「……」。
- (59) その良い結果が不変でありますように。悪い結果が「……」。
- (60) 教師たち、つまりこれらの知者たちが「さらに」 おまえを励ましてくれますように。
- (61) この家で、つまりその主要な場で、「……」でありますように。
- (62) おまえの名前が榮譽をもって選ばれることだろう。その力と卓越さは「……」。
- (63) 牛飼いはおまえの愉快な歌の「ために奮闘する」ことだろう。
- (64) わたし自らおまえの愉快な歌のために奮闘したい。わたしは「……」したい。
- (65) 教師は喜びで満ちたところでおまえを祝福するでしょう。
- (66) おまえはわたしのことに耳を傾けた若者だ。わたしのところは喜ぶ。
- (67) 先生がおまえの手の中に置いたニサバの相応しさが、
- (68) ニサバの巧みな手の中で「おまえを造られた」。おまえの頭を天に向けて「もたげよ」。
- (69) このことが「おまえの」喜びのこころを伴う運命とさせてください。落胆を「持ち上げ」させてください。
- (70) エドゥバ、全知の場所がある「……」⁽⁴⁵⁾

『試験官と生徒の対話』

口述試験の形式を取っている。たぶん書記学校の卒業に必要とされた最終試験であろう。試験官を前

にして生徒はしきりと彼が就いて訓練を受けてきた教師に言及する。六六行以下のテキストから察するに、この部分は中央の行政官を志望する生徒との対話である可能性が高い。同時にこの行政職の候補者は一人ではなく、他にもいたことは明らかである。

(試験官と生徒)

(1) 「若者よ、おまえが生徒か。」「はい、わたしが生徒です。」

(試験官)

(2) 「おまえが生徒なら、

(3) おまえはシュメール語を知っているか。」

(生徒)

(4) 「はい、わたしはシュメール語を話すことができます。」

(試験官)

(5) 「おまえはずいぶん若い。どうしてそう上手く話すことができるのか。」

(生徒)

(6) 「わたしは絶えずわたしの教師のことばに耳を傾けてきました。

(7) ですからあなたにお答えできます。」

(試験官)

(8) 「よろしい、おまえはわたしに答えることができよう。ところでおまえは何を書くのか。」

(生徒)

- (9) 「あなたはわたしが何を書くか、それだけを試験するのだとすれば、
- (10) わたしは学校で過ごした「時間」は三ヶ月未満です。
- (11) シュメール語とアッカド語の「テキスト」、 $AAM-M^{(46)}$ から
- (12) 「…まで」わたしは読み書きができます。
- (13) 全ての行を $^dINAN-TEŠ_2$ から
- (14) $LU_2 = šu^{(47)}$ の始め／終わりの「平原の生き物たち」までわたしは書きました。
- (15) わたしはあなたに示すことができます。わたしの記号と、
- (16) それらの書き方と説明を。そして、これがわたしのそれらについての発音の仕方です。」
- (試験官)
- (17) 「よい。わたしに従いなさい。
- (18) わたしはおまえにあまり複雑なことを出しません。」
- (生徒)
- (19) 「たとえ練習用粘土板に $LU_2 = šu$ を出されたとしても
- (20) わたしは正確な順序で LU_2 の項目六百を述べることができます。
- (21) わたしの学校教育の日課はこのようなものでした。
- (22) わたしの休暇は各月に三日でした。
- (23) いろいろな祝祭が平均して月に三日でした。
- (24) 全部で、月に二十四日ありました。

(25) わたしが学校で過ごしたのは。しかしこの時間は決して長いと思われませんでした。

(26) 一日に先生はわたしに同じ課題を四倍与えるものでした。

(27) 最終的な判断ですが、わたしが書記術について知っていることは取り去られることはないでしょう。

(28) そうゆうわけで、今やわたしが粘土板の意味について、数学について、また予算計上についての師です。

(29) 書記術全体について、行の配列について、省略を回避することについて、さらに「…」についてのものである。

(30) わたしの先生は（わたしの）流麗な弁舌を認めました。

(31) （学校での）仲間との交わりは楽しいことでした。

(32) わたしはわたしの書記術を完璧に知っています。

(33) なにもわたしを混乱させるものはありません。

(34) わたしの先生はわたしにただ一度だけ記号を示す必要がありました。

(35) それに、わたしは記憶から幾つかを加えることができました。

(36) 要求された期間は学校にずっといましたので、

(37) わたしはいまやシュメール語、書記術、説明と予算計上の専門家です。

(38) わたしはシュメール語を話すことさえできます。」

（試験官）

(39) 「それはそうとして、シュメール語の意味はおまえから隠されている。」

(生徒)

(40) 「わたしは書板を（職業的に）書き始めたいと望んでいます。」

(41) 穀類の一分量の書板（から） 六百分量の書板まで。

(42) 一シェケルの書板（から） 二〇ミナの書板まで。

(43) 持ち込まれるどんな結婚契約も、

(44) そして共同事業契約（について）。わたしは一タラントまで証明付重量を明記することができます。
ます。

(45) さらにまた家、庭、や奴隷の売買に関する譲渡証書、

(46) 金融保証書、土地賃貸契約、…。

(47) 椰子の生育契約、…。

(48) 養子縁組契約（につて）、わたしはこれら全てを作成することができます。」

(49・55行は断片)

(試験官？／生徒？)

(56) 「わたしたちは同じ生まれです。わたしたちは…。

(57) 彼とわたしはわたしたちの手になる粘土板を「比較しました」。

(58) 両者は予算を作成しました…。

(59) そして予算に関して…。

(60) 予算…。

(61) 書記のように勘定書を理解できない彼は…。

(62) 粘土板（に書かれている）意味、書記術や難しい読みを持つ記号について、

(63) 彼らに競い合いをさせましょう。

(64) もし彼が勝利したら、彼はわたしのものは何でも取ることになるでしょう。

(65) しかし、わたしが勝利したなら、わたしは何を得るのでしょうか。」

(66・69行は断片的)

(70) 「わたしたちは互いに大声で侮辱するだろう。

(71) 一方は他方と侮辱の張り合いをするだろう。」

おわりに

一般的に言えば今日の人文文学は現代社会において諸学の翳に隠れて埋没しているとみられるか、新たな構築が急務と受け取られがちである。歴史的に遡及するならば、人間が思考する行為者であることを自覚したのは都市社会の出現以降であろう。文字文化を開花させた古代メソポタミアは格好の一例といつてよい。本稿では古代メソポタミアにおける教育の場、つまり古巴ビロニア時代（前二〇〇〇年―一六〇〇年）のエドゥバの諸テキストを検討し現代の高等教育、とりわけ「ことば」にかかわる教育の原点を探ってきた。エドゥバの諸テキストから明確に言えることは「書く」「読む」「口述する」「記憶する」

という行為が基本原理であり、それらの獲得術、つまり書記術の獲得は約束されたものではなく、落第生も出るほど厳しいものであった、ということである。したがってエドゥバの教育は厳格な規律のもとで施された。一人前の書記になるにはかなりの訓練を要した。どれくらいの期間であったのか、残念ながら刊行されたテキストからは判断できない。エドゥバの組織は校長、教授、監督者、助手などから構成されていたことからすると長期間にわたる訓練が想定される。もちろん書記は必要に応じて数年で卒業する者や最終的にはエドゥバに残り教授になる者もいた。いずれにせよエドゥバでは原理として言語教育が基本にあり、様々な語彙集が編纂されていたことは、その後の言語教育の歴史に大きな貢献をしたといつてよいであろう。エドゥバにおける最終試験に認められる言語、数学、音楽の三分野は、古典ギリシア・ローマをはじめその後のヨーロッパにおける学問の中核となっていた。「読書力」や「読書術」と銘打った出版物が目につくこの頃である。近年『ヨーロッパ読書史 読むことの歴史』⁽⁴⁸⁾はアルカイック期のギリシアから今日に至るまでの読書と精神史を「読む」をキーワードとして翻訳出版された。ヨーロッパの文化と精神史を紐解く鍵を提供しているように思われる。少なくとも古バビロニア時代に確立された「読む」「書く」「記憶する」行為の反復練習の系譜は今日にも妥当し、有効であるように思われる。結論として、古典ギリシア・ローマの教育を引き継いだヨーロッパのルネサンス期の教育理念には根底にエドゥバで行われていた教育が同心円的に内包されていると考えられる。大学生の言語表現力が低下していると指摘されている現在、古典レトリックを生かした言語教育を実践している大学もでてきた⁽⁴⁹⁾。言語技術に関する古典ギリシア・ローマ時代に行われた作文法のことである。この作文法は古代メソポタミアのエドゥバで行われていた書記術の獲得法に相関するようにおもわれる。

時間をかけて「書く」「読む」「口述する」「記憶する」というエドゥバにおける書記術の基本は今日の大学教育においても導入教育として大いに見直されてよいのではないか。

（くわばら としかず・北海学園大学教授）

註

- (1) 例えば、長尾十三二『西洋教育史』第二版（東京大学出版会、一九九一年）、一―五頁参照。
- (2) 廣川洋一『ギリシア人の教育』岩波新書（岩波書店、一九九〇年）。本書は教養教育とは何かを古典ギリシア哲学者の理念であるパイデア（*paideia*）から問いただしている。わけでもプラトンとイソクラテスについて人間教育・パイデアを論じている。
- (3) 古代ギリシアの教育を取り扱う場合、アテナイの教育が中心になるが、その特徴について言及しておきたい。リュクルゴス（*Lykurgos*、生没年不詳）伝によれば、市民教育は結婚と出生を優先させ、つまり男女の身体を鍛錬させ、強じんな肉体の結合を奨励した。子どもは全て国家のものとなされ、障碍者や脆弱な子どもは肉体的に育てるに値しないと認定された場合、捨てるよう命令された。この法律はスパルタとローマの古い法典にみいだされる。ギリシア人のあいだでは、教育は決して自由ではなかった。教育は国家が掌握していた。フュステル・ド・クラランジュ（田辺貞之助訳）『古代都市』（白水社、一九九五年）、三二―五頁参照。
- (4) 川島清吉「ヘレニズムの思想と教育」上智大学中性思想研究所編集『ギリシア・ローマの教育思想』教育思想史Ⅰ（東洋館出版社、昭和五九年）、二七三頁参照。
 - I（東洋館出版社、昭和五九年）、二七三頁参照。
- (5) J.P. マハフィー（遠藤輝代・遠藤光訳）『古代ギリシアの教育』（八潮出版社、一九九六年）、三六―三七頁参照。
- (6) 川島清吉「ヘレニズムの思想と教育」二七五―二七六頁参照。
- (7) J.P. マハフィー、遠藤輝代・遠藤光（訳）『古代ギリシアの教育』、七五―七六頁参照。
- (8) 川島清吉「ヘレニズムの思想と教育」二七五―二七六頁参照。
- (9) 小林雅夫「ローマ教育」上智大学中性思想研究所編集『ギリシア・ローマの教育思想』教育思想史Ⅰ（東洋館出版社、昭和五九年）、三四―三四六頁参照。
- (10) 小林雅夫「ローマ教育」三五三―三五六頁参照。
- (11) A. Shindling, *Humanistische Hochschule und freie Reichsstadt* (Wiesbaden, 1977), 178-180. 池端次郎編『資料西洋教育史』第3巻（福村出版、一九九四年）九八―一〇〇頁より一部割愛して引用。
- (12) *Archivio Romano della Compagnia di Gesù, Studium III* ((Documenta de ratione studiorum)) fol. 251. in: K. Hengst.,

Jesuiten an Universitäten und Jesuiten-Universitäten (Paderborn, 1981), 165-167. 池端次郎編『資料西洋教育史』一〇二

～一〇四頁より一部割愛して引用。

- (13) 文字の案出や起源については本稿では取り扱わない。したがって古拙文字以降、つまりウルク第Ⅳ・Ⅲ層(前三三〇〇年から二九〇〇年頃)の時期以降の文字資料を論考対象とする。実質的には古バビロニア時代(前二〇〇〇年から一六〇〇年)書記養成の学校を検討する。

- (14) アッカド語では *bituppi* シュメール語の翻訳である。

- (15) Marc van de Mieroop, *The Ancient Mesopotamian City* (Oxford, 1999), 221. 何千にも及ぶ刊行された前二〇〇〇年期のテキストから五〇〇を越える個人が書記として列挙されている。さらに書記たちの多くの父親の名前や仕事内容まで確認されている。

A. L. Oppenheim によれば、書記の形態は、官僚、詩人、専門職の三つに区分される。“The Position of the Intellectual in Mesopotamian Society,” *Dadalus* 104: 2 (1975), 37-46.

- (16) アシルバニパルはバビロニア全土から楔形文字文学を収集した。多くの作品は複数のコピーが作られ、保存された。粘土板は棚あるいは箱か籠に納められた。しかも主題別に整理されて入れてあった。なかには粘土板の最後に奥付、つまり所有者と書記の名前、作成年月日や写本がこの原本をもとにして作成されたか、を記録したものがあつた。A. L. Oppenheim, *Ancient Mesopotamia*, 2nd ed. (Chicago, 1977), 15-21. O. Pedersen, *Archives and Libraries in the Ancient Near East 1500-300 B.C.* (Bethesda, 1998).

- (17) 中田一郎『メソポタミア文明入門』(岩波書店、二〇〇七年)、一〇〇～一〇二頁参照。初心者向けに書かれた新書版であるが、メソポタミアの書記術について日本語で詳細に紹介されていない現在、貴重な入門書である。このテキストを取り扱った文献にN.クレマー、佐藤輝夫、植田重雄訳『歴史はスメールに始まる』(新潮社、一九五九年)、一五～二七頁がある。なお、このテキストは現在オックスフォード大学のThe Electronic Text Corpus of Sumerian Literature によればScribal training literature に分類され、“É-duba” literature に属する。“Schooldays”はÉ-duba A と名称される。

- (18) 翻字と翻訳はS. N. Kramer, “Schooldays: A Sumerian Composition Relating to the Education of a Scribe,” *JAOS* vol.

- 69 (1949), 199-215.; S. N. Kramer, *the Sumerians* (Chicago, 1963), 237-240. を参照した。
- (19) 四一三三行。
- (20) 四一行。
- (21) 五一～五六行。
- (22) 以前はニダバと読まれた。本来シュメールの穀物女神で、書記術（会計、学問、建築や天文）の守護女神である。前二〇〇〇年期後半から書記術の守護神はナブーに取って代わる。
- (23) 語彙集に「*gub*」M. Civil, 'Ancient Mesopotamian Lexicography,' in *Civilizations of the Ancient Near East* ed. J. M. Sasson (New York, 1995), 2305-2314 を参照。資料や「*gub*」B. Landsberger, (et al.), *Materialien zum sumerischen Lexikon* vol. 1-14, 16, 17, (Rome, 1937-) に「*gub*」。楔形文字の発展と展開に「*gub*」D. O. Edzard, 'Keilschrift,' *Reallexikon der Assyriologie*, Band 5 (1976-1980), 544-568; J. S. Cooper, 'Sumerian and Akkadian,' in *The World's Writing System*, ed. P. T. Daniels and W. Bright (New York, 1996), 37-72.
- (24) 「*gub*」項に「*gub*」W. Sjöberg, "The Old Babylonian EDUBA" in S. Lieberman, ed. *Sumerological Studies in Honor of Thorkild Jacobsen on his AS 20* (1975), 123-57. esp. 161-162 を参照。シュメール語とアッカド語に「*gub*」三語併用に「*gub*」ネキストに「*gub*」。
- (25) 図一から五に「*gub*」S. Tinny "Texts, Tablets, and Teaching", *Expedition*, vol. 40/2 (1998), Fig. 1～12 参照。
- (26) W. Sjöberg "The Old Babylonian EDUBA", 163.
- (27) 日本の漢和辞典の構成と「*gub*」類似「*gub*」。
- (28) 詳細な語彙リストに「*gub*」A. Cavigneaux に「*gub*」"Lexikalisches Listen," *RLA* 6 Band (1980-1983), 609-641 を参照。
- (29) Dumm, É. DUB.BA *ša dajjani*.
- (30) Å. W. Sjöberg, "The Old Babylonian EDUBA," 164-166 参照。次項で取り扱う「試験テキストA」二二行と二五行「*gub*」にその他多種多様な専門職の用語が列挙されている。
- (31) *Ibid.*
- (32) Å. W. Sjöberg, "Der Examenstext A," *ZA* Band 64 (1975), 137-167 参照。

- (33) 解釈とも訳しうる。
- (34) イデオムのようなものか。
- (35) 動詞の時制や態を表したものの。
- (36) 人称代名詞のことか。
- (37) リラなどの弦楽器名・シヌメール語・zami, balag, harhar, gude, アッカド語・samnu, timbuttu, harharru, inn(?)。
- (38) 古巴バロニア時代の数学テキストと数学の概念について、O. Neugebauer, *The Exact Sciences in Antiquity* (New York, 1969), 29-52 が詳しい。
- (39) メソポタミアの音楽については A. D. Kilmer, 'musik' *RLA*, Band 8 (1998), 463-482 を参照。
- (40) バビロニア暦の正月にあたるニサヌ月(太陽暦二月から四月)に十二日間にわたって開催された。行事日程の第四日目に大祭司が『エヌマ・エリシュ』を朗詠する。一連の行事をとおしてバビロニアにおける王朝の安泰と民衆の繁栄を祈る。『バビロンの新年祭』日程の翻訳については後藤光一郎「バビロンの新年祭」訳者代表 杉 勇『古代オリエント集』筑摩文学大系1(筑摩書房、一九七八年)、一九七―二〇六頁参照。
- (41) これらの三編のテキストの翻訳は H. Vansiphoout, "The Dialogue Between Two Scribes," "The Dialogue Between a Supervisor and a Scribe," and "Dialogue Between an Examiner and a Student," 589-593 in *The Context of Scripture - Canonical Compositions from the Biblical World*, vol. one (eds.) W. Hallo and K. Younger (Brill, 1997) を参照
- (42) 助手の役割を担っていた。
- (43) おそらく教師自身か、ないし先輩職員の一とりが話している部分であると思われる。
- (44) 一四六―一四七行は教師の前で助手が生徒を叱る場面であろう。
- (45) 以下六行程度断片的テキストが続く。
- (46) 初心者用の記号リスト。
- (47) 語彙リストの一つ。See Civil, 1985:74.
- (48) ロジェ・シャルティエ／グリエルモ・カヴァッロ(田村毅他共訳)『読むことの歴史』(大修館書店、二〇〇〇年)。
- (49) 佐伯 啓「古典レトリックを生かした言語訓練」『言語』Vol. 37, No. 3 (2008)、四二―四九頁。

